

今週の為替相場見通し(2023年4月10日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		130.64 ~ 133.75	132.15	130.00 ~ 135.00
ユーロ	(ドル)		1.0788 ~ 1.0973	1.0898	1.0800 ~ 1.1100
(1ユーロ=)	(円)		142.57 ~ 145.41	143.80	142.00 ~ 146.00
英ポンド	(ドル)		1.2275 ~ 1.2525	1.2412	1.2200 ~ 1.2700
(1英ポンド=)	(円)	*	162.78 ~ 166.41	164.10	162.00 ~ 165.00
豪ドル	(ドル)		0.6641 ~ 0.6793	0.6674	0.6640 ~ 0.6790
(1豪ドル=)	(円)	*	87.59 ~ 90.17	88.16	87.10 ~ 88.70

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 山岸 寛昭

(1)今週の予想レンジ: 130.00 ~ 135.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

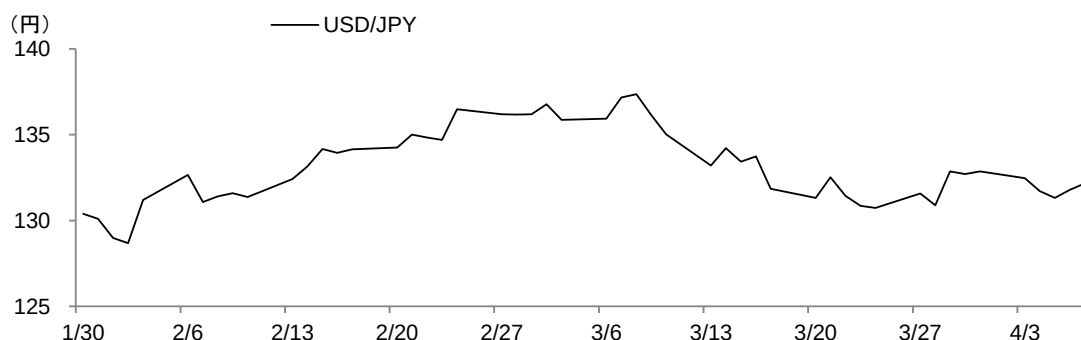
先週のドル/円相場は、軟調な米経済指標を背景に下落するも、週末にかけて買い戻される展開。週初3日、133.34円でオープンしたドル/円は、OPECプラスが減産を発表し、原油高からドル買い・円売りが発生し一時週高値となる133.75円に上昇。海外時間に米3月ISM製造業景気指数が市場予想を下回ると米金利が低下、132円台前半に反落した。4日、ドル/円はドルの買い戻しで133円台まで続伸も、米2月JOLT求人件数が軟調な結果となり、労働市場の緩和が意識され米金利低下とともに131円台後半に反落。5日、米3月ISM非製造業景気指数が弱い結果となり、米金利は下げ幅を拡大し一時週安値となる130.64円に下落した。6日、ドル/円は翌日に米3月雇用統計の公表を控える中、イースター休暇前のポジション調整もあってドルが買われ131円台後半に上昇。7日、米3月雇用統計がほぼ予想通りの結果となったことで米景気への過度な警戒感が和らぎ、ドル/円は132円台に上昇、132.15円で越週した。

今週のドル/円は底堅い展開を予想。米国の高インフレから利下げ期待は時期尚早で、追加利上げ観測もありドル/円は底堅い展開か。米インフレはピークアウトするも、FRBが重視する個人消費支出(PCE)コアインフレ率は足許前年比4%台。3月FOMCで発表されたFRB経済見通しでは、2023年通年のコアインフレ率を3.6%と予測。インフレ率が目標2%を大きく上回る状況で、年内2回程度の利下げを見込む市場織り込みは行き過ぎの可能性も。あと1回利上げ後に年内据え置きとするFRBのドットチャートに市場織り込みが収れんする過程で、米金利の上昇とともに、ドルの買戻しが入る展開も予想される。先週発表の米3月雇用統計では、失業率が前月より低下し、平均時給は前月比で上昇が加速。人手不足による賃金上昇が容易には収束しそうになく、次回5月FOMCでの追加利上げは十分に想定される。円の需給も、円売り材料として意識しておきたい。年間20兆円の本邦貿易収支は過去最大の規模。直近3月の下落局面でも130円割れの滞空時間短く、実需筋などドル買い円売りニーズは強いとみられ、ドルの下値は堅いと予想する。下落リスクとしては、米経済指標の下振れに留意。先週発表の米3月ISM景気指数は製造業・非製造業ともに市場予想を下回る結果となった。利上げの影響による米景気減速が意識されるが、調査対象期間が米銀破綻の直後で弱い数字が出やすかったとの指摘もあり、米景気動向は慎重に見極める必要があるようだ。今週のイベント・経済指標としては、12日(水)発表の米3月CPI、FOMC議事要旨(3月開催分)の内容に注目したい。

(3)先週末までの相場の推移

先週(4/3~4/7)の値動き:

安値 130.64 円 高値 133.75 円 終値 132.15 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

市場営業部 為替第二営業チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 1.0800 ~ 1.1100 142.00 ~ 146.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、底堅い動きとなった。3日、1.0803でオープンしたユーロ/ドルは、OPECプラス会合後の原油高を受けたドル買いを背景に一時週安値となる1.0788に下落。その後は、軟調な米経済指標の結果が材料視されて欧米金利差が縮小し、1.09ちょうど付近へ反転上昇した。4日、ユーロ/ドルは市場予想を下回った米求人統計を受け、前日に続いて米金利が低下したことを受け、一時週高値となる1.0973に続伸した。5日、ユーロ/ドルは週高値圏での推移が継続も、NY時間にはドルの戻り買いもあり、1.09ちょうど付近に下落した。6日、ユーロ/ドルは休暇前のポジション調整のドル買いで1.09を割り込む場面も見られたが、NY時間には独金利が上昇に転じたことを受け1.09台前半を回復した。週末7日のユーロ/ドルは、米3月雇用統計がまずまずの結果となったことを受けてドル買いからユーロ売りが強まる場面もみられたが、概ね1.09台前半での推移が継続し、1.09ちょうど付近にてクローズした。

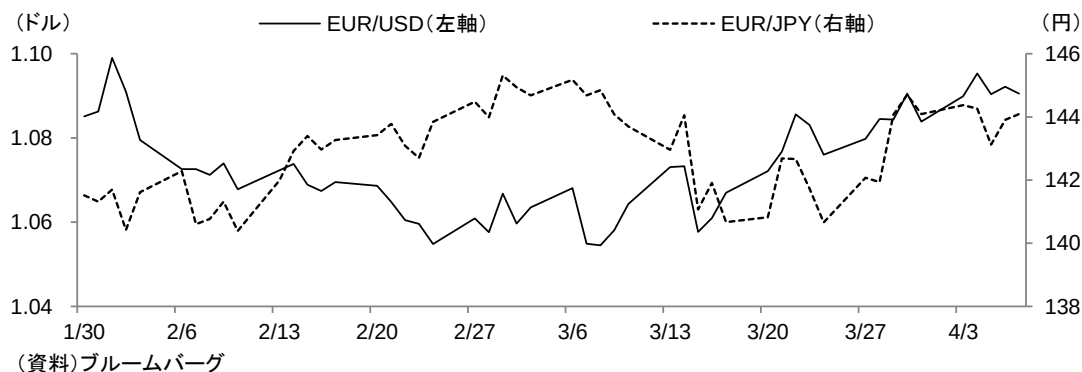
今週もユーロ相場は底堅い推移を予想している。背景は、欧州の利上げ観測継続によるユーロ買いと、米利上げ観測縮小によるドル売り。先週発表された欧2月PPI(前年比)は前月比・予想比改善したが、13.2%と依然高い水準となっている。一方で、同じく先週発表された欧3月製造業PMIは前月比・予想比プラスの47.3、サービス業PMIは前月比・予想比を下回るも55.0と50を上回っておりまずまずの結果となっており、ECBが利上げを継続しインフレ対策を継続できる環境が残っていると考えている。一方で、米国では12日(水)発表予定の米3月CPIは総じて前月比低下する予想となっており、5月の米利上げ織り込みは低下しドルは売られ安くなるのではないかと予想している。また、11日(火)発表予定の欧2月小売売上高は前月比低下、13日(木)発表予定の欧2月鉱工業生産は前月比改善する予想となっており、欧州関連の経済指標の結果はまちまちの予想となっているため、ユーロの上値が伸びづらい場面も見られるかもしれないが、欧米の利上げ観測の違いにより基本的にはユーロ買い・ドル売りの流れは継続すると考えている。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/3~4/7)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0788 高値 1.0973 終値 1.0898

(対円) 安値 142.57 高値 145.41 終値 143.80



3. 英ポンド

欧州資金部 中島 將行

(1) 今週の予想レンジ: 1.2200 ~ 1.2700 162.00 ~ 165.00 円

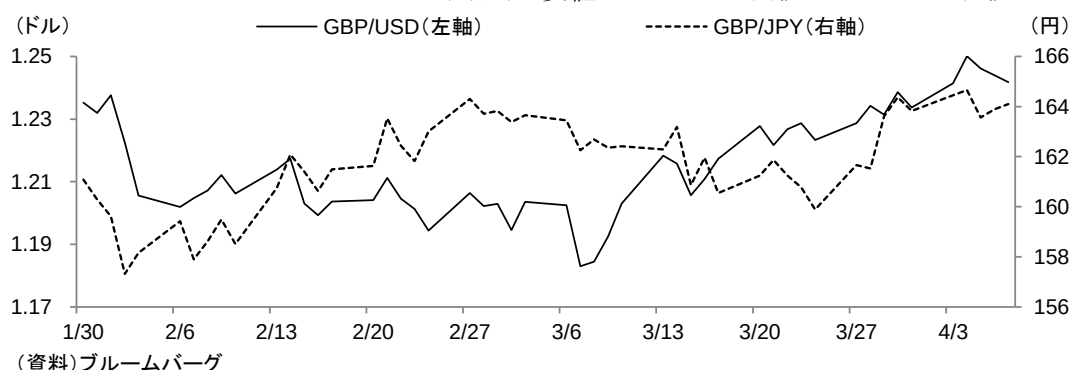
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は、週明け3日から4日にかけて対ドルで急騰した後、5日以降は下落し、もみ合う展開となった。週間を通してみれば対ドルでの上昇を維持した一方、対円ではドル安・円高の進行を受けて週明け日の上昇分が全て打ち消される格好となった。対ドルでのポンドの上昇は米経済指標の市場予想に対する下振れに伴うドル安の裏返しという側面も大きい。先週1週間の英ポンドの対ドル上昇率は、日本円を除く他のG10通貨を上回っており、英国個別の要因も影響したと見られる。3日発表の米3月ISM製造業指数、4日発表の米2月求人件数は市場予想を下回る結果となり、米金利低下・ドル安が進んだ。米求人件数発表と同日の4日にはイングランド銀行(BOE)のビル・チーフエコノミストが、「ベース効果とエネルギー価格の下落が相まって、今年は総合インフレ率が大きく低下すると予想されているが、国内要因による物価上昇が持続する可能性があるため、インフレ見通しの評価にはまだ注意が必要」とするコメントを発表しており、5月11日の次回会合での追加利上げを支持する可能性を示した。現状、米国の2年金利は英国の2年金利を上回っているが、先週は両者の差が縮小しており、英ポンド上昇を後押ししたと見られる。なお、4日にはBOEのテンレイロ委員が「おそらくこれまで考えられていたよりも早期の利下げに着手する必要がある」という見方を示しているが、もともと同氏はMPC内で最もハト派と位置付けられるだけに、市場の反応は限定的だった。5日以降は英ポンドは反落。4日の時点でグローバルに株式相場が下落しており、米雇用関連指標の軟化への市場の評価が金融引き締め懸念後退(リスクオン)から、景気減速懸念(リスクオフ)に移りつつあることがうかがわれる。5日発表の米3月ADP雇用統計は市場予想を下回る結果となったが、円やスイスフランが上昇する一方、ポンド、ユーロは下落と、週初とは異なる反応となった。7日は米3月雇用統計を控えレンジ推移。米雇用統計公表直後は良好な失業率などが材料視され英ポンドは一時1.24を割り込むが、すぐに1.24台を回復。その後は小動きにとどまり、結局1.2412で越週した。

今週の英ポンド相場は、対ドル・対円で上値の重さが意識されようが、総じて底堅い動きを見込む。引き続き、米経済指標・金融政策動向への目配りは重要である。7日(金)及び10日(月)の祝日の影響もあり、先週7日(金)発表の米3月雇用統計への評価が遅れて市場に反映されると見られるほか、12日(水)には米3月消費者物価指数、FOMC議事要旨(3月会合分)が発表される。引き締め懸念が再燃すれば、折からの景気減速懸念と相まって、リスクオフのドル高となるリスクが大きい。とはいえ、先週の相場上昇を受けて、英ポンドのファンダメンタルズが他の欧州諸国に比べて相対的に健全という見方も広がりつつある。とりわけ、英国景気の先行きに対する市場の見方が改善し、利上げ期待が高まりつつあることや、3月の欧米金融システムの混乱を経て英国の銀行の経営が相対的に安定しているとの評価が高まっている点は、ポンドのサポート材料となろう。英国では12日(水)にベイリーBOE総裁講演、13日(木)に3月RICS住宅価格指数が公表される。ベイリー総裁は、3月24日放送のBBCのインタビューで物価上昇が続けば再び利上げする必要があるとの見方を示していた。4月6日に発表されたBOEの3月調査では、企業経営者の1年後のインフレ見通しは年間+5.8%と2月の+5.9%から若干、低下したものの高止まりを続けていることが示されている。こうした状況を受けて、ベイリー総裁が5月会合での追加利上げ実施を示唆する可能性は高まりつつあるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/3~4/7)の値動き: (対ドル) 安値 1.2275 高値 1.2525 終値 1.2412
(対円) 安値 162.78 高値 166.41 終値 164.10



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 安藤 愛

(1) 今週の予想レンジ: 0.6640 ~ 0.6790 87.10 ~ 88.70 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドル相場は、週初に上昇も、その後は下落し概ね往って来い。前週末にOPECプラスが予想外の追加減産を発表したことを受け、インフレ懸念が再燃。明けて3日、米ドルが買い優勢となる中、豪ドルは序盤上値重く一時0.6650付近まで下落。ロンドンオープン頃から、米ドルに実需の売りが入り、豪ドルは上昇に反転。その後発表された、米3月ISM製造業景気指数が予想を下回ったことから米ドル売りが加速し、豪ドルは0.6790まで急騰した。4日、RBA理事会では政策金利の据え置きを決定。発表直後、豪ドルは買いで反応したものの、声明文のフォワードガイダンスが若干ハト派に変更されたと解釈され、すぐに反落して0.6750付近まで下落。その後もじりじりと下値を追う展開となったが、NY時間に入り発表された米2月JOLT求人件数が予想を下回ったこと等から米ドルに売りが膨らむと、豪ドルは下値を支えられ0.6750付近まで小幅買い戻された。5日、RBNZが予想外に+50bpの利上げを発表したことでNZドルが急上昇する中、連れ高となり一時0.6780を付けた。その後、ロウRBA総裁の講演原稿が発表されると、「前日の金利据え置き決定は利上げ終了を示唆するものではなく、更なる引き締めが必要になる可能性がある」との記述に反応して再び豪ドルに買いが入ったが、すぐに反落。軟調な株価を横目にじりじりと下落し、一時0.6678まで売り進まれた後、米3月ADP雇用統計、米3月ISM非製造業景気指数が予想を下回ったことで米ドルが売りで反応すると、豪ドルは0.6720付近まで買い戻された。6日、この日発表された豪2月貿易収支及び中国3月サービス業PMIがどちらも予想比上振れたものの、リスクオフの流れに押されて豪ドルは頭重い値動きに。米新規失業保険申請件数が上振れると米株は売りで反応したが、売り一巡後は買い戻しが優勢に。豪ドルも0.66台半ばまで下落した後小幅買い戻された。7日、米3月雇用統計を控えじり高推移。米雇用統計発表直後は堅調な失業率等が材料視され豪ドルは一時週安値となる0.6641まで下押す。その後すぐに値を戻し落ち着きを取り戻すと、0.66台後半でじり安推移となった。

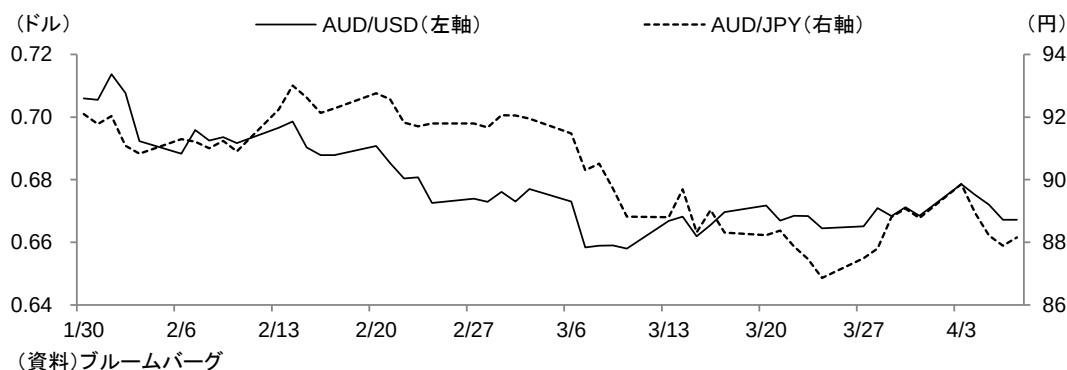
今週の豪ドル相場は方向感の出にくい相場が継続すると予想する。先週は軟調な米経済指標の発表が相次ぎ、景気後退懸念が再燃。米ドル売りを背景に豪ドルは抵抗線として意識されていた200日移動平均線を一度上抜けたが、翌日のRBAによるフォワードガイダンスのハト派修正を受けて下落トレンドに転じ、レジスタンス超え定着に失敗した。米3月雇用統計は比較的堅調な結果となったものの、米景気後退懸念を背景とした利下げ織り込みが進行する一方でRBAの利上げ停止観測も強まっており、今週は米3月消費者物価指数や豪3月雇用統計の結果に振られながら、200日移動平均線近辺でもみ合う展開を予想する。豪雇用統計に関しては12~1月に一旦軟化したものの2月は再び堅調な結果となり、今週発表される3月の指標に注目が集まっている。事前予想では新規雇用者数の増加が前月から減速し失業率も小幅悪化することが見込まれているが、想定以上に強い結果が出た場合は利上げピークの上方修正が入り、豪ドルは買いで反応すると予想する。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/3~4/7)の値動き:

(対ドル) 安値 0.6641 高値 0.6793 終値 0.6674

(対円) 安値 87.59 高値 90.17 終値 88.16



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。